

金融機関のグローバル戦略遂行における M&A と IFRS の影響

三橋優隆（プライスウォーターハウスクーパース株式会社）

要旨

リーマン・ショックを契機として、日本の金融機関はグローバルプレイヤーへの足懸かりとして外資系金融機関へのメガディールを敢行したことは記憶に新しい（野村 HD+リーマン、三菱 UFJ 証券+モルガン・スタンレー、三井住友 FG+日興コーディアル等）。こうした動きに加え、国内競争での勝ち残りやグローバル競争に必要な基礎体力の獲得を目指した国内金融機関同士のメガマージャーも増加し（中央三井信託+住友信託、あおぞら+新生、損保ジャパン+日本興亜、三井住友 IG+あいおい+ニッセイ同和等）、さらには中国・インドといった巨大市場に加え、ベトナムなどの急成長市場での事業展開を狙った直接投資案件も増加している。こうした金融機関のグローバル戦略としての M&A を遂行する上でプランニングやデューディリジェンスの際に、全世界的に普及してきている国際財務報告基準（IFRS）の影響を考慮に入れる必要があるだろう。日本においても、2015 年もしくは 2016 年をターゲットとして IFRS を強制適用する方向性が有力視されており、今後欧米企業との会計基準差は急速に縮小されていく予定である。本ワークショップでは、金融機関にとって IFRS の影響が大きいとされる主要分野の概要を整理すると共に、グローバル戦略上必要となる M&A を実行するにあたり、IFRS がどのような影響を与え得るかについての洞察を試みたい。

略歴

プライスウォーターハウスクーパース ジャパンにおけるディールアドバイザリー部門の責任者。1979 年からプライスウォーターハウス会計事務所で監査業務の経験を積み、1997 年から M&A 関係の業務に専念し、多くの案件の財務 DD 及びそれらに関連する各種アドバイスを提供。買収後の対象会社との統合を通じた案件の価値の最大化を目的とした案件にも関与。1983 年公認会計士登録。1980 年慶応義塾大学経済学部卒業。